

# 東シンブー諸語サブグループピングに向けて\*

千田俊太郎

キーワード：パプア諸語、シンブー諸語、比較言語学、トーン

## 1 はじめに

本稿の目的は東シンブー諸語のサブグループピングに向けて行なってきた調査の中間報告を行なふことである。トーンの比較による言語の歴史の考察が可能であることを一つの論点とする。

東シンブー諸語はシンブー語族 (Simbu language family) に属するグループである。シンブー語族は、Hagen-Wahgi-Jimi-Chimbu family (Wurm 1960)、Central family of East New Guinea Highlands stock (Wurm & Hattori 1983)、Chimbu family (Foley 1986)、Chimbu-Wahgi (Osmond 2001) などとも呼ばれてきた。

シンブー諸語が全體として語族をなすことはほぼ確実である。次はこの語族のほとんど全てに反映形が残されてゐる同源語から再構される語彙の例である。

- (1) a. \*na I
- b. \*kan vine
- c. \*ma- mother
- d. \*kan- to see
- e. \*p- to go

■東シンブー諸語と西シンブー諸語 シンブー語族は東西に大きく分かれると考へられる。最も目に付く違いは否定辭の形式で、東グループは否定辭が軟口蓋閉鎖音に始まる接尾辭であるのに對し、西グループ (Hagen-Wahgi-Jimi) は否定辭が齒莖鼻音に始まる接頭辭である<sup>1</sup>。

- (2) a. 東シンブー祖語: \*-kl NEGATION
- b. 西シンブー祖語: \*na- NEGATION

---

\* この論文は科学研究費補助金「ドム語の民族誌的言語資料の調査研究」(代表者: 千田俊太郎、研究課題番號: 20720107) と「パプア諸語の比較言語学的研究—南ブーゲンヴィル諸語と東シンブー諸語を対象として」(代表者: 大西正幸、研究課題番號: 20320065) の支援を受けた研究成果の一部である。地球研での口頭発表の際にコメントをくださった方々、草稿を見てくださった森若葉さん、伊藤雄馬さんに感謝いたします。

<sup>1</sup> 西グループの Nii 語の否定辭-na は接頭辭ではなく接尾辭だが、音形は他の西シンブー諸語の否定辭と同源である。なほ、西グループの否定辭 \*na- は東グループの未來 (あるいは irrealis) 標識の \*-na と關聯付けられる可能性がある。

また、下に見えるやうに西グループの \*o 終りの動詞語根は東グループでは \*i, \*e, \*u の母音終はりに對應してゐる。

- (3) a. *to hit* \*ti- (E)、\*to- (W)  
b. *to eat* \*ne- (E)、\*no- (W)  
c. *to come* \*u- (E)、\*wo- (W)

その他、動詞、名詞の屈折や同源語の分布などについても東西の違いが見られ、これらはシンブー語族の辿つた第一の方言分岐を反映するものであらう。更に詳細に論じるためにはまづ東グループ、西グループそれぞれについて、祖語のシステムの検討が必要である。

西グループの諸言語については別個に調査・研究が必要となる。筆者自身は中ワギ (Mid-Wahgi, Kup 方言) とカンダウォ (Jimi/Kandawo, Amblua 方言) の一部語彙と語形變化を調べたが、どちらの言語も隣接する東シンブー諸語 (特にクマン系諸方言) の影響を明らかに受けてをり、ここから東西の比較を始めるのは困難である。そこで、本稿では東グループについてのみ検討することになる。

■東シンブー諸語 次は本稿で考へる東シンブー諸語の大まかな下位分類である。この根據の一部についてのちに論じることになるが、先に見取り圖として提示する。

#### (4) East Simbu (東シンブー)

##### 1. Central and South Simbu group

###### ● Kuman group:

- Kinde Kondo: Kundiawa, Kerowaki\*, Gembogl, Yogomugl, Yogoml\*, Endugla\*
- Bari-Naure\*: Bari\*, Naure\*
- Nangen-Kunana: Nangen Ku, Kunana Ku\*

###### ● South Simbu group

- Dom: Dom 1\*, Dom 2\*, Era
- Golin group:
  - \* Golin-Mian\*: Golin\*, Mian\*, South-Yuri
  - \* Yuri: Mid-Yuri\* (Ol Dale Yuri), North-Yuri\* (Moro Sul Yuri)
  - \* Kia: Omkolai Kia\*, Salt Kia\*

###### ● ? Sinasina シネシネ: Tabare, Gunaa\*, Nimai-Dika\*, Kere, Kepai

###### ● ? Salt: Salt-Yui, Keri, others?

##### 2. Chuave-Nomane group

###### ● Chuave-Eri Bari group

- Chuave: Duom Kobu\*
- Eri Bari: Yagari\*

###### ● Nomane group

- Kewa-Meba\*
- Megne (Meine)\*
- Kiari

(4) で\*印のついた言語・方言は筆者が直接調査に入つたものである。(4) で下線付きのグループはほぼ問題のないまとまりをなすと考へるものである。日本語では次のやうに表記する。

- (5) a. クマン・グループ (Kuman group)  
 b. ドム (Dom)  
 c. ゴリン・グループ (Golin group)  
 d. スワウェ・エリバリ・グループ (Chuave-Eri Bari group)

圖 1 は諸方言の分布を示す地圖である。

■話者の居住形態 一般にこの地域では土地の所有權が父系繼承されるため、移住が起ころぬ限り民族・言語の分布域は排他的な連續體をなす。婚姻により他地域の(従つて多くは他言語話者の)女性が常に流入してゐるため、そこに單一民族・單一言語が行なはれてゐるとは必ずしも言へないが、コミュニティの言語および子供が繼承する言語は常に夫方のものである。ところで、移住のケースも稀ではない。ソルト・キアとバリの事例を紹介しておく。

ソルト・キア (Salt-Kia) は地圖上ゴリン・グループの飛び地として示してある。オムコライ (Omkolai) に居住するキア (Kia) の一部がソルト地域に移住した歴史があり、言語的にもオムコライ・キアの姉妹分である。ただし、二つのキア居住地域の間にあるケリ (Keri) の言語がゴリン系である可能性、しかもキアに近い方言である可能性もあり、もしさうであればグループとしては飛び地にならない。

バリ (Bari) の位置はバリのみが居住する中心地域に示してあるが、避難民が處々に點在してをり、ドム内にもいくつかの區域を得てゐる。ただし、移住二世以降は言語的には地域の言語(例へばドム内ではドム語)を母語とする者が多い。

■民族と言語 提示した地圖の表示は、民族分布圖と言語分布圖の折衷的なものになつてしまつてゐる部分がある。今後、さらに調査を進め、改善しなければいけない點もある。

まづ、この地域における民族をどのレベルに設定するかといふことが問題になりうる。人々が最も強く歸屬意識を感じてゐるのは氏族のレベルで、これは最大でも 5000 人程度の集團である。その上位のまとまりが、多くの場合存在する。グループのレベルが何段階かにわたることもあるが、上位を辿つてゆき、今日の行政區劃に至る手前が多くの場合民族・言語共同體と考へられるため、これを本稿での民族とする。

何を言語とし、何を方言とするかといふ問題もある。本稿の議論はより小さなグループがどのやうな階層的なまとまりをなすか、検討してゆくことであり、本來はこの作業が終はつてこそ決定できることかもしれないが、先のクマン・グループ、ドム、ゴリン・グループ、スワウェ・エリバリ・グループが「言語」レベルとして適當ではないかと考へてゐる。ただしスワウェ・エ

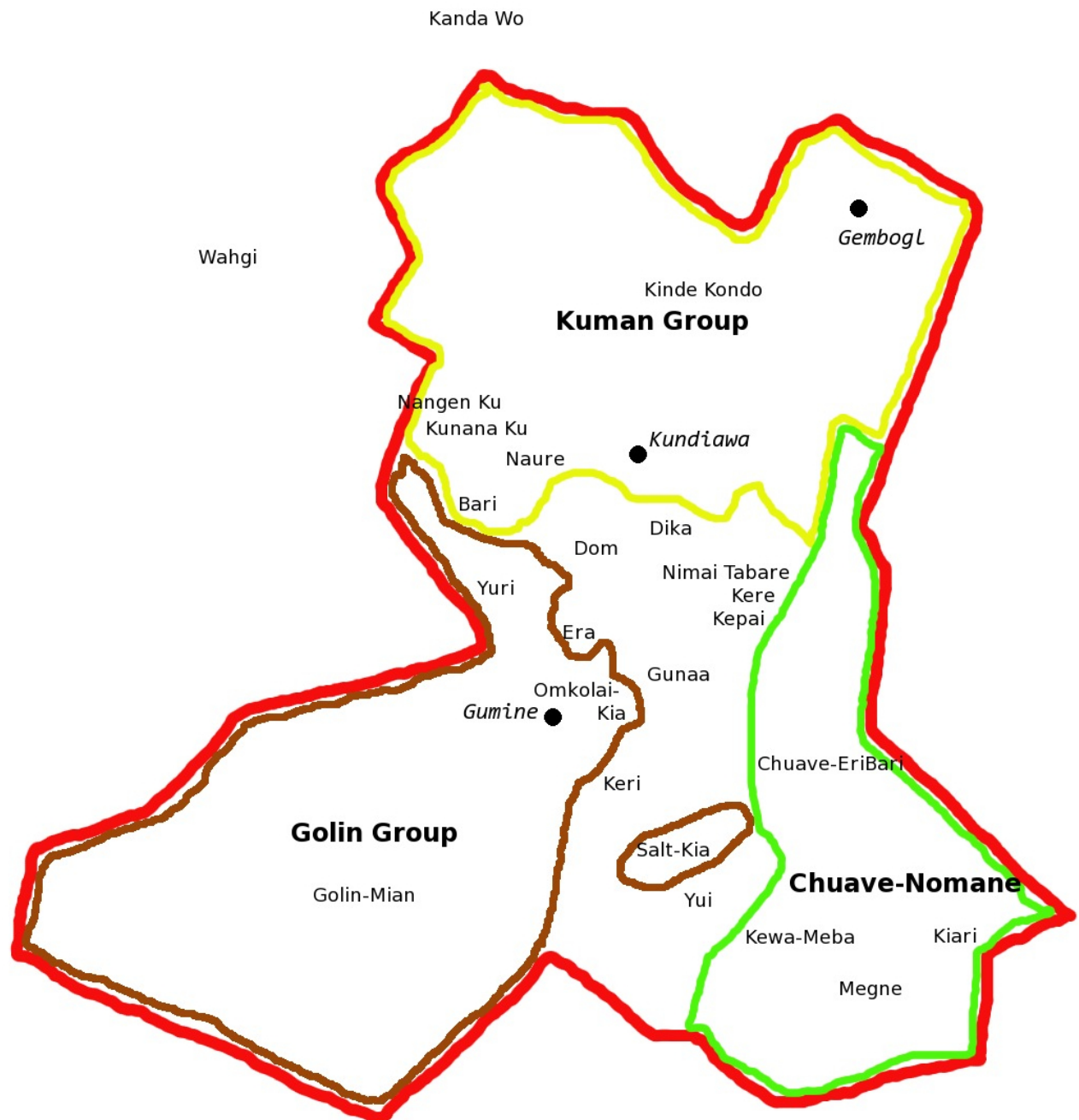


図1 東シンブー諸方言分布地図

リバリ・グループ以外の東シンブー諸方言は一つの方言連鎖をなすかもしれない。地図にはより小さな言語集団の名前を書き入れてある。

民族と言語共同体がずれることもある。その際、なるべく民族名を言語名としない方が混乱せずにすむ。

例へばキンデコンド (Kinde Kondo) は本稿で新しく導入する言語名である。これは、いくつかの民族を抱える大言語であり、これまで「クマン語」と呼ばれてきた<sup>2</sup>。しかし、明らかに

<sup>2</sup> 「クマン」はもともと民族名ではなく、クマン系諸方言で「西、西部地域」を表はす語彙であり、命

クマン系の方言の中に、これまで「クマン語」特有のものと考へられてきた特徴をもたないものがあることが筆者の調査により分かった。「クマン」はグループ全體の名前とするのが適當だと考へ、下位言語・方言には別の名稱を與へた。シンブー住民は方言差に言及する際、しばしば「やめろ、するな」表現を引き合ひに出す。キンデコンド語では「Kinde Kondo」が「やめろ」である。これを使へばシンブー諸語の中の一つを同定することができるし、民族名ではない上に現地でも容易に分かつてもらへる。

このやうな方針では命名が難しいこともある。キンデコンドは地域的な廣がりも人口も多い大言語であり、いくつも方言がある。その一つをエンドウガ (Endugla) と示したが、この命名にはいくつか問題が残る。エンドウガは民族名でもある。民族としてのエンドウガには下位民族グループクナナ・ク (Kunana Ku)、ナウレ (Naure) があり、そのクナナ・ク、ナウレはキンデコンド語を母語としない。クナナ・ク、ナウレではないエンドウガを一括して呼ぶ言ひ方はないが、クナナ・ク、ナウレ以外のエンドウガは全てキンデコンド語のエンドウガ方言を話す。

ゴリン・グループの命名にもクマン・グループと似た事情がある。これまでゴリン語と呼ばれてきたのは本稿のゴリン・ミアン (Golin-Mian) に該当する。明らかにゴリン系で、しかも「ゴリン語」特有の語彙・文法から外れる特徴を持つ方言があり、關聯する名稱を再編した。まづ、言語學者には定着した名稱であるゴリンはグループ全體の名前とした。ゴリンは民族名に由來するので、これに問題がないわけではないが、簡便で良いと思ふ。

ゴリン系言語は少なくとも四つの民族ゴリンのほかミアン (Mian)、ユリ (Yuri)、キア (Kia) によつて話されてゐることが確認されてゐる。ゴリンとミアンは比較的大きな言語共同體をなすので、かれらの話す言語をゴリン・ミアンとしてまとめた。キアは先に述べた通り、二箇所に分かれて分布してをり、居住地域による方言差がある。元の居住地域にゐるキアの方言をオムコライ・キア (Omkolai-Kia) と呼び、ソルト (Salt) 地區に移住したキアの方言をソルト・キアと呼ぶ。ユリが最も問題になる。ユリの話す方言のうち、二變種 (居住地域の北部と中部) の語彙データを採集することができ、いくつかの方言を話すことが分かつてゐる。一先づデータのあつた二變種について、居住地域と民族名から北ユリ (North-Yuri)、中ユリ (Mid-Yuri) と呼び、その言語的上位グループをユリと呼ぶ。グミネ (Gumine) に近い地域 (ユリ分布の南部) には直接は調査に入つてゐないが、Evans, Besold, Stoakes, and Lee (2005) の資料提供者が民族的にはユリであり、その資料は他の二つのユリ方言よりゴリン・ミアンに近い。ユリの民族的下位グループ南ユリ (South-Yuri) がゴリン・ミアンを話すのだと推定する。

以上のことは、先行文獻における言及とすり合はせた結果でもある。クマン・グループ、ゴリン・グループはおそらく言語のレベルに相當するものとすれば、クマン語、ゴリン語と呼んでも構はない。その諸方言の名前を設定し、先行文獻に現はれる變種の同定を行なつたところが本稿で新しい部分となる。

また、未調査の民族・地域の言語は命名ができない。未調査地域には一旦民族の名前を地圖上に表示した。以下に地域別に挙げる。

---

名の經緯は不明だが、主に言語學者などによる他稱である。

- (6) a. シネシネ: Tabare, Kere, Kepai
- b. ソルト: Keri, Yui
- c. ノマネ: Kiari

上記のうち、Tabare は McVinney and Luzbetak (1954) が「シネシネ (Sinasina) 語のタバレ (Tabare) 方言」、ユイ (Yui) については Irwin (1974) が「ソルト・ユイ (Salt-Yui)」と呼んだ言語を話す集団で、ある程度の居住位置がわかり、地図に示した。

## 2 サブグループにおける問題点

東シンブー諸語について、先行する主だった資料は次の通りである。

- (7) a. キンデコンド語: Bergmann (1953), Bergmann (1965 66), Hannemann (nd), Nilles (1969), Trefry (1969), Lynch (1983), Piau (1981), Hardie (2003)\*\*
- b. タバレ語: McVinney and Luzbetak (1954)
- c. スワウェ語: Swick (1966)\*\*, Swick (1969)
- d. ゴリン・ミアン語: Bunn and Bunn (1970)\*\*, Bunn (1974)\*\*, Evans et al. (2005)\*\*
- e. ユイ語: Irwin (1974)
- f. ドム語: Tida (2006a)\*\*

その他の方言には語彙リストさへない。ある程度のデータがあつても、特にトーンの記述は詳しくない。例へば Irwin (1974) や McVinney and Luzbetak (1954) はトーンが辨別的であることに気付いてみながら例示は二、三にとどまり、分析はない。トーンについてデータの提示と分析があるものは上に\*\*印を付したものである。これにも問題がないわけではなく、Swick (1966)、Bunn and Bunn (1970)、Bunn (1974) は例示が少ないだけでなく分析にも不足がある (Tida 2003b)。

本稿で提示するデータは基本的に全て筆者の独自調査によるものである。ゴリン系については Bunn and Bunn (1970)、Bunn (1974)、Evans et al. (2005) も参照するが、Bunn and Bunn (1970)、Bunn (1974) については Tida (2003b) に基づき以下の三種の語聲調をもつものと再解釈したデータを用いる。

### (8) 高型 (Γ) 語の全ての音節が高いピッチ

例: gwí *wind*, díl *pumpkin type*, múrú *all*, níbíl *sick*, bíríín *ridge pole*, máálé *bamboo*, díínán *my ribs*, sígwíne *ant*, kébínán *my young sibling*

→: 「gwi, 「dil, 「muru, 「nibil, 「biriin, 「maale, 「diinan, 「sigwine, 「kebinan,

### 上昇型 (V) 語末音節のみが高いピッチでその他の音節は低いピッチ

例: puúl *knife*, digé *armband*, naalé *locust*, gilaá *night*, gumán *nose*, onibá *snake*, goroká *Goroka*, ebinín *your wife*, bolimanán *my pig*

→ √puul, √dige, √naale, √gilaa, √guman, √oniba, √goroka, √ebinin, √bolimanan

低型 (L) 語の全ての音節が低いピッチ

例: *mo or, bol bed, keba sweet potato, gaan child, ogan/ogunan my house, taale two days from today*

→ *lmo, lbol, lkeba, lgaan, logan/ogunan, ltaale*

## 2.1 相互理解可能性

相互理解が完全に可能な方言が隣接することによつてなる連続體があれば、それを一つの方言連鎖と看するのが良い。しかし、東シンブー諸語の相互理解可能性は少々複雑なところもある。つぎの事実が事態を複雑にする要因である。

- (9) a. キンデコンドが威信的な言語であつたため、他方言話者もキンデコンドを一方向的に理解できる場合がある
- b. 多言語・多方言使用が常態化してをり、相互に通じる方言なのか、受動的な多言語使用なのか判断が難しい場合が多い

従つて、他言語の一方向的な理解が見られる場合でも、それが方言の近似性によるものかどうか判断しにくい。筆者の観察と話者の報告を合はせると、方言間の相互理解について次のようなことが言へる。

- (10) a. スワウェ・グループ言語の話者は内部では比較的均質であるが、外のシンブー諸方言とはほとんど相互理解ができない
- b. ノマネ諸方言の話者は内部では受動的な言語使用による相互理解が可能で、他地域の話者とはほぼ相互理解が不可能である
- c. キンデコンド話者はほかのシンブー諸方言をほとんど理解できない (バリ・ナウレは少し分かるのかもしれない)
- d. バリ・ナウレ話者はドムやキンデコンドをかなり理解できるが、ゴリン系言語は方言により凡そ理解できる程度である
- e. ドム話者はバリ・ナウレをかなり理解し、ゴリン系言語も方言によりかなり理解できるが、キンデコンドはほとんど理解できない
- f. ゴリン系は方言により話者がドムをかなり理解する

以上から、一番大まかにはスワウェ、ノマネを他の方言群と分けることができさうである。ただし、方言間の相互理解の可能性は最も大まかな目安であり、サブグルーピングの強い根拠にはならない。

## 2.2 同源語の分布

同源語の分布、同源語の共有率もサブグルーピングの一つの根拠になりうる。東シンブー諸語では、同源語の分布からもクマン・グループ、スワウェ・エリバリ・グループ、ゴリン・グ

ループの三グループを認めることができる。表 1 に内容語の同源語分布状況の典型例を挙げた。「その他」の言語で筆者が独自のデータを持つてゐるものはドム、ニマイ・ディカ、グナアがあるが、これらは今のところ詳細なサブグルーピングができてゐない。表 1 の 1 と 2 はクマン、スワウエ・エリバリ、ゴリンが全て異なる語彙を持つ場合、3 はクマンのみ、4 はスワウエ・エリバリのみ、5 はゴリンのみが異なる語彙を持つ場合である。

	クマン	スワウエ・エリバリ	ゴリン	その他
1 <i>finger</i> <i>breadtree</i>	*mog-e *kokn	*dwa-m *emei	*ml-n *ma	*ml-n, *mog-e gurau, *emei
2 <i>woman</i> <i>grease</i> <i>cassowary</i> <i>finish</i>	*ab *wam *kobri *du	*obal *dur-om *koinime *gou?		*abal *kul- *eb/pi *wai, ?
3 <i>grandchild</i> <i>snake</i> <i>bow</i> <i>Dolichos lablab</i>	*gawa- *toki *kibr *meula	*gau- *onba, ? *sml *koga (dai)		
4 <i>moon</i> <i>father</i> <i>enough</i> <i>side post</i> <i>central post</i> <i>good</i> <i>plentiful fig</i> <i>firewood gathering</i> <i>to carry on head</i> <i>hunger</i> <i>worm</i>	*ba *ne-m *para *gule *kaulage *wakai *kola *suk- *me- *ktan *degrme	*kaba *aw-om *more *mug-om *tokral *nogabu *sugoro *ger- *mau- *mtan- *deiwa	*ba *ne-m *para *gule, ? *kaulage *wakai *kola *suk- *me-, *mau- *ktan, *mtan *deklme, *deiwa	
5 <i>fern sp.</i> <i>palm</i> <i>head</i>		*tab/mno *sura *br/l-e	*bop/ba *mori-n *gibl-n	*tab/mno *sura *br/l-e

表 1 同源語の分布

同源語の分布のなかでも特に文法形式の共有は系統論において重要な位置を占める。しかし、文法形式の共有状況については、東シンプー諸語の場合、関係が近すぎるためかグループ間の際立つた違いがあまりない。この点は次節にて述べる。



### 2.3 分節音の變化

規則的な音韻對應を見付け、祖語における音價を推定する比較の方法を踏まへた上で、歴史的に同じ音變化の過程を共有したかどうか検討することがサブグルーピングにおける根據として一般に有効である。ただし近い方言間では、歴史的に経た音變化が少ないこともあり、同じ音變化過程を経験したのか、それともたまたま同じ音變化が起こったのか、はたまた別の方言からの影響下に變化規則を借用したのか判断に困る部分もある。まづ例として表2を見られたい。

	スワウエ	エリバリ	キンデ コンド	バリ・ ナウレ	ドム	ゴリン・ ミアン	祖形
<i>Don't do it!</i>	—	—	ʌkod-a	ʌkor-a	ʌkor-a	—	*koda
<i>lizard</i>	ʌgui	ʌgur	ʌgur	ʌgur	ʌgur	ʌguri	*ʌgur/*ʌgul
<i>harvest (taro)</i>	you-	you-	ʌyok-	ʌyok-	ʌyu-	ʌyu-	*yok-
<i>afternoon</i>	ʌpou	ʌfou	ʌpok	ʌpok	ʌpu	ʌpu	*ʌpok
<i>back</i>	ʌmog-om	ʌmogle-m	ʌmok-o	ʌmok-e	ʌmu	ʌmu-n	*ʌmok-
<i>neck</i>	ʌnog-om	ʌnogo-m	ʌnog-o	ʌnok	ʌno	ʌno-n	*nog-
<i>value</i>	—	—	ʌtop	ʌtopo	ʌtop	—	*ʌtop
<i>oil pandanus</i>	ʌkoba	ʌkoba	ʌkoba	ʌkopa	ʌkopa	ʌkoba	*ʌkoba
<i>urine</i>	ʌbowi	ʌbour	ʌbul	ʌbul	ʌbul	ʌbul	*ʌboul
<i>man</i>	ʌyai	ʌyar	ʌyal	ʌyal	ʌyal	ʌyal	*ʌyal
<i>big lizard</i>	ʌkemei	ʌkemei	ʌkemi	ʌkemi	ʌkemi	ʌkemi	*ʌkemei
<i>yam</i>	ʌkom	ʌkom	ʌkom	ʌkom	ʌkom	ʌkon	*ʌkom

表2 分節音の對應と問題點

表2で使用した語に前置するトーンについては後に述べる。またスワウエ・エリバリの動詞や一部の再構形にトーン記號がないのはさらに検討が必要だからである。同源語が分布してゐない欄は「—」で示す。確認できる諸方言に起こった音變化を次にまとめる。

- (11) a. \*g → ∅ (non-word-initial)
- b. \*k → u (non-word-initial)
- c. \*ou → u, \*ei → i
- d. \*p:\*b, \*r:\*d, \*k:\*g の合流
- e. \*l:\*r の合流
- f. \*l → i (not between vowels)
- g. \*m → n (word-final)

以上の音變化は、実際には方言により少々異なる条件下に起こったものもある。例へば \*k → u の規則はドムやゴリン系諸方言では語頭以外といふ条件下に起こるが、スワウエ・エリバリで

は一部の\*k を g として閉鎖音で残す。

また、エリバリでは \*l → r が無条件にすべての場合に起こったが、スワウエでは \*l → r は母音間でのみ起こり、その他の環境では \*l → i が起こったやうだ。

大局的に見ると、方言間で共通する音変化過程には、スワウエ以外に共通するもの (11c)、キンデコンド以外に共通するもの (11d)、バリ・ナウレ、キンデコンド以外に共通するもの (11b)、ゴリン・グループとドムに共通するもの (11a) がある。以上を表 3 にまとめる。

	スワウエ	エリバリ	キンデ コンド	バリ・ ナウレ	ドム	ゴリン・ ミアン
(11a) *g → ∅	no	no	no	no	yes	yes
(11b) *k → u	yes	yes	no	no	yes	yes
(11c) i *ou → u	no	no	yes	yes	yes	yes
(11c) ii *ei → i	no	no	yes	yes	yes	yes
(11d) i *p: *b merger	yes	yes	no	yes	yes	yes
(11d) ii *r: *d merger	yes	yes	no	yes	yes	yes
(11d) iii *k: *g merger	yes	yes	no	yes	yes	yes
(11e) *l: *r merger	yes	yes	no	no	no	no
(11f) *l → i	yes	no	no	no	no	no
(11g) *m → n	no	no	no	no	no	yes

表 3 各方言に起こった音変化の過程

以上の事実は上に例示した諸方言のサブグルーピングには不十分である。その理由は第一に、サブグルーピングに關する音変化が實質四種類のみ (11a-d) だといふ點である。(11e)、(11f) は条件の違いから見てもスワウエとエリバリに起こった個別の變化であり、\*ou → u と \*ei → i や、\*p: \*b, \*r: \*d, \*k: \*g の合流はそれぞれセットで起こったと考へられるからである。

つぎに、變化規則の歴史的な共有によつて解釋できない部分を多く含むといふことがある。これらのうち一部は明らかに同一規則が偶然、あるいは系統外の要因によつて共有された結果と考へるべきものである。まづ、軟口蓋音の變化過程はドム語やゴリン系諸語ではつぎの順に起こったものと思へなければならない。

- (12) 1. ● \*g → ∅ (non-word-initial)  
 ● \*k → u (non-word-initial)  
 2. ● \*k: \*g の合流  
 ● \*ou → u, \*ei → i

以上の順でなければ \*pok → \*pou → pu の變化は説明できない。ところがスワウエ、エリバリでは次の (13) のやうな似た規則をもつてゐながら第一段階で經るべき \*g → ∅ を起こしてゐない。

(13) 1. \*k → u (non-word-initial)

2. \*k:\*g の合流

そのため、ドム語、ゴリン系諸語、スワウェ語、エリバリ語で共通して見られる\*k:\*g の合流は、言語史の共有によるものとは考えることはできない。

同様に、バリ・ナウレではつぎの變化を経たと思はれるが、どちらもドム語やゴリン系諸語との系統関係によるものとは言へない。ドム語やゴリン系諸語が経た第一段階を共に踏まへてゐないからである。

(14) 2 ● \*k:\*g の合流

● \*ou → u, \*ei → i

すると\*p:\*b, \*r:\*d, \*k:\*g の融合や\*ou → u, \*ei → i は傳播したケースを含む可能性が高い。

以上見てきたところによれば分節音の變化によつて東シンブー諸語の方言分岐を論じることが難しい。後述するやうに、\*m → n の變化だけはゴリン・グループの有効な指標となるが、他の分節音的特徴をもつて確實に言へることはあまりない。そこで本稿では分節音のみならず、トーンに注目してみたい。

トーンは諸方言でさまざまな變化を起こしてをり、トーンを利用すれば音變化を基盤とするサブグルーピングができる可能性を以下に示したい。トーンを含めても音變化の一部は傳播するやうだが、一定量の音變化に語彙の分布や文法的な事實を加へれば、系統的な足取りは把握可能であるやうに思はれる。

## 2.4 トーン

シンブー諸語はおそらく全てがトーン言語で、語を領域とするメロディーが辨別的であると考へられる。東シンブー諸語のトーンの對應と歴史について、つぎのやうな問題點が指摘できる (Tida 2008)。まづ、一見トノジェネシスを期待させるデータがあるのに、その線では解くことができないほど多くの對應パターンが出るため、トノジェネシスどころか、祖語のシステムが現代語のどれよりも複雑だつた、といふ結論になりさうであること。つぎに、資料が増えれば増えるほど例外パターンも増え、規則的な對應が見出しにくい場合があること。そして、トーンの對應から、祖語のトーンを割り出す方法に明らかでない部分があること。

一方で、最近の調査の結果資料が増え、トーンの比較を進めたところ次のことが明らかになりつつある。まづ、トーンの對應は分節音と同様、あるいは東シンブー語族では分節音以上に系統関係究明のために重要であること。より近い方言間ではかなり規則的な對應があることが分かつてをり、今後も諸方言におけるトーン資料の蒐集を積み重ねてゆくことで東シンブー諸語の經た言語變化の歴史をもつと明らかにできる可能性があること。以下順に述べてゆく。

東シンブー諸語のトーンは音韻的には語を領域とする對立するメロディーである。メロディーのパターンは高 (high)、下降 (falling)、上昇 (rising)、低 (low)、落調 (key-lowering trigger)

の五種類にまとめることができる<sup>3</sup>。最後の「落調」はキンデコンド、グナア、ソルト・キアなどに見られるトーンの一つで、語單獨の発音では少々の上昇を示すが後続語が存在する場合それ自体は高平メロディーをとり後続語からの基調 (key pitch) を低く設定し直す効果をもつものを指す用語として本稿で導入する。落調の音聲的実現は語末に浮遊する高調によると考えられる。以下の略號、記號<sup>4</sup>を使用する。

H	(Γ)	high
F	(ʌ~ʔ)	falling
R	(ʌ~ʌ)	rising
L	(L)	low
D	(ʔ)	key-lowering (downtrend) trigger, or word-final floating L

まづトノジェネシスを疑はせるような例は、つぎのやうなものである。

- (15) キンデコンド語 ʌsugwa [ʃuŋʔgwa] ‘s/he hits’,  
           ʌsukgwa [ʃuʔkŋʔgwa] ‘s/he collects (firewoods)’  
       ドム語 ʌsugwe [ʃuŋʔgwe] ‘s/he hits’,  
           ʌsugwe [ʃuŋʔgwe-ʔ] ‘s/he collects (firewood)’

上の例はキンデコンド語の分節音に關する最小對の同源語がドム語においてはトーンに關する最小對となつてゐる場合があることを示してゐる。キンデコンド語はドム語と同じく語を領域とする三種のメロディーが對立するトーン・システムをもつが、壓倒的多數の語が下降メロディーを持ち、落調トーンが極端に少ない。例へば動詞の活用形は連用形を除き全て下降メロディーをとる。そこで、キンデコンド語においてはトーンの果たす辨別的な役割はドム語のそれに比べて小さいと言へる。トーンの辨別機能が小さい言語 (キンデコンド語) で分節音による對立があり、トーンの辨別機能が大きい言語 (ドム語) では分節音による對立がない代はりトーンによる對立が存在するのだから、トノジェネシスが疑はれる。

また、つぎのドム語の例では語根 ʔne に一人稱主語直説法の語尾-ke がつくると下降トーンをもつ。

- (16) 食べ ʔne [neʔ]  
       私が食べた ʌneke [neʔke]

<sup>3</sup> ノマネ地区の諸方言やグナアについてはトーン對立の在り方がまだ十分に明らかになつたとは言へない。これら方言にはさらに別のメロディー/タイプをトーン音素として認める必要があるが、本稿では扱はない。またドム語ではメロディー對立のほかトーンの領域の始まり指定が語彙的に必要となるが、他の諸方言との比較がまだ可能ではない。今後の課題である。

<sup>4</sup> 下降メロディーは多くの方言で高いピッチから大きく下降する (ʔ) がソルト・キアなど低めのピッチから下降し (k) さらに任意で最後に若干の上昇を伴ふ方言もある。上昇メロディー (ʌ) ではピッチがそれほど高く上がらない方言、環境もあり、特に Mid-Yuri の上昇メロディーは顯著に上昇幅が狭い (ʌ)。その他の詳細は方言間比較のために單純化して考へる。

東シンブー諸語全體に見られる傾向として、長めの語が調値變化のある (contour) メロディーをもち、短めの語が調値變化のない (level) メロディーをもつことが分かつてゐる。すると上のやうな例から考へられる可能性は、ある條件によりピッチの違ひが生じ、語彙的に定着したあと分節音の變化によりピッチ特徴のミニマル・ペアができたといふ筋立てである。しかし、トーンの比較を進めると、東シンブー語族の祖語にはトーン對立を假定せざるを得ない。表 4 に東シンブー諸語におけるトーンの對應の様子を示すため各言語よりいくつかの語彙を抜き出した。

	ドム	バリ・ ナウレ	キンデ コンド	グナア	ゴリン・ ミアン	ソルト ・キア	スワウェ
<i>sugarcane</i>	「bo	「bo	「bo	「bo	「bo	「bo	「bo
<i>word</i>	「ka	「ka	「ka	「ka	「ka	「ka	「ka
<i>left</i>	「kora	「kora	「koda	「kora	「kora	「kora	「kora
<i>soft</i>	「ura	「ura	「uda	「ura	「ura	「ura	「ura
<i>oil pandanus</i>	「kopa	「kopa	「kopa	「kopa	「koba	「hopa	「koba
<i>fowl</i>	「korale	「korwal	「kodwale	「korale	「korale	「hoale	「kowane
<i>kunai</i>	「iraun	「iraun	「idaun	「iraun	「erwan	「erwã	「eran
<i>seedling</i>	「ipe	「ipe	「ibo	「ipn	「opn	—	「ibom
<i>central post</i>	「kaula	「kaulake	「kaulag	「kaulike	「kaula	「haua	—
<i>bed</i>	「bol	「bol	「bol	「bol	「bol	「bol	「boi
<i>light (not heavy)</i>	「u	「u	「u	「u	「u	—	—
<i>hot</i>	「nika	「nika	「niga	「nika	「niga	「nega	「niga
<i>wild rice</i>	「kupa	「kupa	「kuba	「kupa	「kuba	「kuba	「kuba
<i>sun</i>	「ar	「ar	「ade	「are	「ari	「ari	「are

表 4 トーンが規則的對應を示す語彙

このトーン、すなはち音韻的に對立するメロディーの對應はノマネ・グループを除くとかなりの程度規則的で、繰返し觀察される對應パターンは表 5 の七通りである。このうち第一パターンと第二パターンは語の長さに違ひが見られるやうであり、相補分布をなす。また、第六パターンと第七パターンは例が非常に少なく、ドム語とニマイ・ディカ語にしかこの對立が現はれないことから、この二言語で特殊な變化を経た一つの音素に由來するものかもしれない。第一・第二パターン、および第六・第七パターンをトーン上同一祖形に遡ると考へるとしても、五パターンは今のところ條件分岐による説明がつかず、祖語に五種のトーン對立があつたものと假定しなければならない。現代の東シンブー諸語でこれまでにトーン體系が分かつてゐる言語のうち、最もトーンの對立が多いものでも四種のトーン對立しかもつてをらず、現代語のどれよりも複雑なトーン體系を假定せざるをえないことが難點ではある。祖語におけるトーンの音價は第一・第二パターンが \*H、第三パターンが \*F、第四パターンが \*R であることにほぼ間違ひない。第五パターンから第七パターンについてはかりに \*L, \*D1, \*D2 としておく。

	ドム	ニマイ・ディカ	バリ・ナウレ	クナナ・ク	キンデコンド	グナア	ゴリン・ミアン	中ユリ	北ユリ	オムコライ・キア	ソルト・キア	スワウエ	エリバリ
1 *H (short)	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H
2 *H (long)	H	H	R	R	F	R	H	H	H	H	H	L	L
3 *F	F	F	F	F	F	F	R	F	R	F	F	R	R
4 *R	R	R	R	R	F	R	R	R	R	R	R	R	R
5 *L	R	R	R	R	F	R	L	R	R	R	D	H	H
6 *D1	R	R	L	L	D	D	L	R	R	R	D	R	R
7 *D2	H	H	L	L	D	D	L	R	R	R	D	R	R

表5 東シンブー諸語のトーン對應

まだ解決できない問題を含むものの、東シンブー諸語のトーンの歴史的變化にはサブグループニングに關與的なものが分節音より多い。またトーンによる分類は同源語分布などで想定できるグループを裏付けてくれるものでもある。表6にトーンの變化過程をまとめた。この觀點から見ると、四グループを容易に認めることができる(特に表6下線部の變化に注目すると手つ取り早い)。以下、更に詳しくみる。

まづ、ドムとニマイ・ディカ、スワウエとエリバリはそれぞれ現代語のトーン反映形が完全に一致する。ドムとニマイ・ディカの關係はまだ確定的ではないが、スワウエとエリバリの系統的な近さを保證してくれる一つの根據になる。それぞれ、共有した變化規則を考へるとつぎの通りである。

(17) ドム、ニマイ・ディカに共通の變化

1. \*R, \*L, \*D1 → R
2. \*D2 → H

(18) スワウエ、エリバリに共通の變化

1. \*H → L (long words)
2. \*F, \*D → R
3. \*L → H

つぎに、クマン・グループに屬するバリ・ナウレ、クナナ・ク、キンデコンドに加へ、グナアがトーンの歴史に共通點を見せる。\*L→R による\*R:\*Lの合流を経験しながらも、それと\*Dとの對立を維持し、\*Hトーンの長い語が調值變化するメロディーに變化したことが他のグルー

	ドム	ニマイ・ ディカ	バリ・ ナウレ	クナナ・ ク	キンデ コンド	グナア	ゴリン・ ミアン	中ユリ	北ユリ	オムコライ・ キア	ソルト・ キア	スワウエ	エリバリ
*L:*D merger	no	no	no	no	no	no	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>yes</u>	no	no
*L → H	no	no	no	no	no	no	no	no	no	no	no	<u>yes</u>	<u>yes</u>
*L → R	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>yes</u>	(yes)	<u>yes</u>	no	yes	yes	yes	no	no	no
*D1 → R	yes	yes	<u>no</u>	<u>no</u>	<u>no</u>	<u>no</u>	no	yes	yes	yes	no	yes	yes
*D2 → R	no	no	<u>no</u>	<u>no</u>	<u>no</u>	<u>no</u>	no	yes	yes	yes	no	yes	yes
*D2 → H	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>no</u>	<u>no</u>	<u>no</u>	<u>no</u>	no	no	no	no	no	no	no
*R → F	no	no	no	no	yes	no	no	no	no	no	no	no	no
*F → *R	no	no	no	no	no	no	yes	no	yes	no	no	yes	yes
*H → L(long)	no	no	no	no	no	no	no	no	no	no	no	<u>yes</u>	<u>yes</u>
*H → *R(long)	no	no	<u>yes</u>	<u>yes</u>	(yes)	<u>yes</u>	no	no	no	no	no	no	no

表6 東シンブー諸語のトーン変化

プと異なる特徴となつてゐる。なほ、キンデコンドはクマン祖語 \*R を維持せず獨自に F との合流を起こしたと見ることができ、\*R, \*L, \*H (long) の変化結果は \*R を経由した F であると考へられる。これらが共有する変化規則を考へるとつぎの通りである。

(19) バリ・ナウレ、クナナ・ク、キンデコンド、グナアに共通の変化

1. \*R, \*L → \*R
2. \*H → \*R (long words)

ただし、これのみによつてクマン・グループとグナアとの系統的なつながりを確信することはできない。この點は後述する。

最後にゴリン・グループに屬するゴリン・ミアン、中ユリ、北ユリ、オムコライ・キア、ソルト・キアはドム語などに特徴的な\*D2→H やクマン語に特徴的な\*H→\*R やスワウエ・エリバリに特徴的な\*L→H, \*H→L(long) などを共有してゐない。また\*H, \*F, \*R の對立を祖語の在り方のまま維持しながら、\*L と \*D の對立を失つた段階を経たグループである。D メロディーは語末に浮遊調値の L をもつものと解釋できるから、合流自體は自然だが、合流の結果のメロディーについては判斷を保留したい。その\*L, \*D 由來のトーンがさらに R に變化したものがある。共有した變化過程は次の通りである。

(20) ゴリン・ミアン、中ユリ、北ユリ、オムコライ・キア、ソルト・キアに共通の変化

- \*L:\*D merger

以上の分析では、東シンブー祖語に五種のトーン對立を認めてゐる。現代の東シンブー諸方言では最もトーン對立が多いものでも四種の對立にとどまるため、現代諸方言より複雑なトーン・システムを祖語に假定してゐることになる。またトーン變化の動機についてもまだ詳しいことが分からない。パプア諸語のトーン比較、再構の試みには Kamano-Yagaria 方言連鎖を對象とした Ford (1993) があり、やはり複雑な祖語のシステムを假定してをりトーン變化の動機も扱つてゐない。

閉ぢた語類の韻律システムは言語全體にみられる韻律システムの一部にしかならないことがある。東シンブー諸語においては、分離不可能名詞と動詞が、二つの代表的な閉ぢた語類であり、すべての言語である種のトーン體系單純化が起こつてゐるやうである。この二つの語類が示すトーンについて次に述べる。

#### 2.4.1 分離不可能名詞

分離不可能名詞のトーン對應 (表 7 に例) は、上に見た一般的なトーン對應と異なる部分がある。規則的な對應パターンは五種類のみであり、一般的對應とは細かい異同がある。

	ドム	バリ・ ナウレ	キンデ コンド	グナア	ゴリン	ソルト・ キア	スワウェ
his/her son	ɿwam	ɿwam	ɿwam	ɿwan	ɿwan	ɿwā	ɿwam
his/her nose	ɿguma	ɿguma	ɿguma	ɿguman	ɿguman	ɿgumā	ɿgumam
his/her mother	ɿmam	ɿmam	ɿmam	ɿman	ɿman	ɿmā	ɿmam
his/her hand	ɿo	ɿoke	ɿogo	ɿokn	ɿon	ɿō	ɿogom
his/her back	ɿmu	ɿmoke	ɿmoko	ɿmu	ɿmu	ɿmū	ɿmogom

表 7 分離不可能名詞

分離不可能名詞のトーン對應をまとめると、表 8 の通りである。IN1 はソルト・キア語で R が出ることを除けば \*H(長い語) の一般的對應と同じである。分離不可能名詞は長い語の一種で、調値變化のあるメロディーが好まれたものと解釋できる。IN2、IN3 はそれぞれ \*F、\*R の一般的對應に等しい。IN4 は \*L の一般的對應とほぼ同じだが、スワウェ語とエリバリ語で R に對應する。これも長い語で調値變化のあるメロディーが好まれた結果かもしれない。IN5 は \*D1 の對應に近いがクマン系のバリ・ナウレ、クナナ・ク、キンデコンドではクマン祖語 \*R にしか遡れない。そこで分離不可能名詞のトーンでは \*L と \*D の違いはいまのところグナアにしか見られない。クマン系諸方言とグナアの違いがトーンにも見られる。

これらの對應からそれぞれの言語で分離不可能名詞にトーン體系の縮小がもたらされてゐることが分かる。例へばバリ・ナウレは四種のトーンをもつが、分離不可能名詞ではそのうち二種しか現れない。ソルト・キアやスワウェ、エリバリでもトーン對立が減つてゐる。

それぞれの言語で語類特有のトーン變化を経たものとする、つぎの通りにまとめられる。



	ドム	ニマイ・ ディカ	バリ・ ナウレ	クナナ・ ク	キンデ コンド	グナア	ゴリン・ ミアン	中ユリ	北ユリ	オムコ ライ・キア	ソルト・ キア	スワウ エ	エリバ リ
IN1 *H	H	H	R	R	F	R	H	H	H	H	<u>R</u>	L	L
IN2 *F	F	F	F	F	F	F	R	F	R	F	F	R	R
IN3 *R	R	R	R	R	F	R	R	R	R	R	R	R	R
IN4 *L	R	R	R	R	F	R	L	R	R	R	D	<u>R</u>	<u>R</u>
IN5 *D	R	R	<u>R</u>	<u>R</u>	<u>F</u>	D	L	R	R	R	D	R	R

表8 東シンブー諸語のトーン変化 (分離不可能名詞)

(21) バリ・ナウレ、クナナ・ク、キンデコンド

- \*D → \*R (inalienable noun)

(22) ソルト・キア

- \*H → \*R (inalienable noun)

(23) スワウエ、エリバリ

- \*L → \*R (inalienable noun)

## 2.4.2 動詞

動詞のトーン對應を取るにはいくつかの手續きが必要となる。動詞は活用形によりさまざまなトーンを取る。トーンも活用形の形成要素の一部といふわけである。またその活用クラスは通常複数存在し、動詞は語彙的に決まったパターンで活用する。ここでは活用の仕組みが判明してをり、動詞の活用クラスの歸屬が明らかになつてゐるドム語、クマン系諸方言、ゴリン・ミアン語のみを対象とする。

まづ、祖語にまで遡りうる活用クラスが四つ存在し、祖語では語根單獨でのトーンと語根末の分節音に活用クラスの特徴が出る。高トーンで短母音終はりの一音節動詞語根、下降トーンで\**l* 終はりの一音節動詞語根、下降トーンで\*d 終はりの一音節動詞語根、上昇トーンの動詞語根が四つの活用クラスをなす。以下の通り略號を定める。

(24) V1 \*high (vowel-ending class)

V2 \*falling (\**l*-ending class)

V3 \*falling (\**d*-ending class)

V4 \*rising

ナウレ語は四種が對立するトーン體系をもつが、動詞の活用形には L が現はれず、動詞に限れば三種のトーンしか對立してゐない。

ゴリン・ミアンは動詞のほとんどの活用形において L:R の對立が見られず、音聲的にも L~R の揺れが觀察される。動詞語根單獨ではこの音聲的な揺れは觀察されないが、やはり H と L の二つのみが對立するシステムをなす。

次に動詞語根單獨の發音を比較する (表 9) と、トーンの對應パターンは五つ見られる (表 10)。

	ドム	ニマイ・ ディカ	バリ・ ナウレ	キンデ コンド	ソルト ・キア	オムコラ イ・キア	ゴリン・ミアン Bunn 千田 + 千田 Evans et al		
<i>say</i>	「d-	「d-	「d-	「d-	「d-	「d-	「d-	「d-	「d-
<i>stay</i>	ʌmol-	ʌmol-	ʌmol-	ʌmol-	ʌml-	「ml-	「ml-	「mile-	「mili
<i>burn(tr.)</i>	ʌgal-	ʌgal-	ʌgal-	ʌgal-	「gal-	ʌgal-	ʌgal-	—	「gali
<i>pull</i>	ʌgur-	ʌgur-	ʌgur-	ʌgud-	ʌgur-	ʌgur-	ʌgur-	—	「gura
<i>see</i>	ʌkan-	ʌkan-	ʌkan-	ʌkan-	「hani-	ʌkan-	ʌkar-	ʌkare	「kare

表 9 東シンブー諸語の動詞語根

	ドム	ニマイ・ ディカ	バリ・ ナウレ	キンデ コンド	ソルト ・キア	オムコラ イ・キア	ゴリン・ミアン Bunn 千田 + 千田 Evans et al		
V1 *H	H	H	H	H	H	H	H	H	L, M, H
V2a *F	F (l)	F (l)	F (l/r)	F	R (l)	H (l)	H	H	M
V2b *F	F (l)	F (l)	F (l/r)	F	R	H	L	—	M
V3 *F	F (r)	F (r), R	F (r)	F	R	R (r)	L	—	M
V4 *R	R	R	R	F	H	R	L	L	L, M

表 10 東シンブー諸語のトーン變化 (動詞語根)

以上の表には参考に Bunn 資料の千田による再解釋と、Evans et al. (2005) の對應も入れた。Bunn 資料は筆者の Golin-Mian 記録に完全に一致する。Evans et al. (2005) の資料は分節音的には筆者の Golin-Mian に相當するが、動詞トーン資料では mid トーンが多い。

動詞語根に特有のトーン變化がゴリン・ミアンに起こつたと考へられる。下降トーンで 1 終りの活用クラス (V2) は分岐を假定しなければならないが、これには條件がありさうである。表 11 には V2 の動詞語根の對應を挙げた。...al- に遡るもののみがゴリン・ミアンで低トーンをもつことが分かる。

以下にゴリン・ミアンで起こつたと考へられる動詞語根のトーン變化を記す。

		ドム	バリ・ ナウレ	キンデ コンド	ゴリン・ミアン Bunn 千田 + 千田 Evans et al		
<i>stay</i>	*\mol-	\mol-	\mol-	\mol-	「ml-	「mile-	「mili
<i>die</i>	*\gol-	\gol-	\gol-	\gol-	「gul-	「gule-	「guli
<i>take off</i>	*\gul-	\gul-	\gul-	\gul-	「gul-	—	—
<i>draw water</i>	*\kol-	\kol-	\kol-	\kol-	「kul-	—	—
<i>make bed</i>	*\kul-	\kul-	\kul-	\kul-	「kul-	—	—
<i>be damaged</i>	*\bol-	\bol-	\bol-	\bol-	「bl-	「bil-	「bli
<i>roast in ashes</i>	*\bl-	\bl-	\bul-	\bur-	「bl-	—	—
<i>burn(tr.)</i>	*\gal-	\gal-	\gal-	\gal-	「gal-	—	「gali
<i>call</i>	*\dal-	\dal-	\dal-	\dal-	「gal-	—	「gale
<i>cut</i>	*\bal-	\bal-	\bal-	\bal-	「bal-	—	—
<i>bite</i>	*\kal-	\kal-	\kal-	\kal-	「kal-	—	—
<i>plant</i>	*\yal-	\yal-	\yal-	\yal-	「yal-	—	—

表 11 V2 a/b の例

(25) Golin-Mian:

- \*F → L (V2 [+low] + l-, V3 verbs)
- \*F → H (verb root)
- \*R → L (verb root)

ゴリン・ミアンは分節音レベルでも動詞特有の變化 (26) が生じてをり、このやうな語類特有の音變化はありうる。

(26) Golin-Mian:

- \*o → ∅ (verb root \*[+labial]+ol-)
- \*o → u (verb root \*..ol-)

なほ、(26) の變化はゴリン・ミアンとキアに共通して起こつた變化だが、同じゴリン系でもユリはこの變化を共有してゐない。

動詞語根のトーンは活用クラスと關係を有し、活用クラスは動詞語根の分節音列と關聯する。これらの關係は密接であり、分節音列の祖形が分かれば\*d 終はりの動詞語根以外は所屬活用クラスと祖語のトーンが豫測できる (Tida 2006b)。しかし、いまのところ動詞の祖形にもトーンを想定する方が良ささうである。トーン對立發生の音聲的動機が分からないし、いづれにせよ祖語全體にはトーン體系を想定せざるを得ないからである。

### 3 グループ別のまとめ

ここでは前の節までに論じたことのほか、スワウエ・エリバリ、ゴリン、クマンの各グループの特徴、ドム語の特徴、及びグループ内の方言の違いについて情報を追加しながらまとめ、スワウエ・ノマネがグループをなす可能性について述べる。

#### 3.1 スワウエ・エリバリ・グループ

スワウエ・エリバリ・グループは主に分離不可能名詞につく所有者接辭の形が他の東シンブー諸方言に見られるものと若干異なる形式をもつなど、文法形式においても他グループと相違を示す。以下にグループの特徴をまとめる。

- (27) a. \*-nam (1SG), \*-n (2SG), \*-(o)m (3SG), \*-nom (PL)
- b. \*-ke による直説法をもたない
- c. ei, ou の保存
- d. トーン変化 \*H → L (long words)
- e. トーン変化 \*F, \*D → R
- f. トーン変化 \*L → H
- g. トーン変化 \*L → \*R (inalienable noun)
- h. 共時的トーン対立: H, R, L
- i. 前鼻音化子音をもつ方言がない
- j. /k/, /p/ の摩擦音化がしばしば起こりそれぞれ [x], [f] で現はれることが多い

所有者接辭の対立は、東シンブー諸方言全體では\*-na (1SG), \*-n (2SG), \*-m (3SG), \*-ne (PL) を再構できるが、\*-m を除くと二次的な形式である。これら、所有者人稱接辭は代名詞 \*na (1SG)、\*en (2)、\*no/\*ne (1PL) あるいは\*ne (reflexive) が接辭化したものと考えられ、スワウエ・エリバリ・グループではさらに m のついた\*-nam (1SG), \*-nom (PL) を發達させたやうである。

他の東シンブー諸方言では身體部位、親族語彙を中心とする限定的なセットである分離不可能名詞にのみ所有者接辭をつける。スワウエ・エリバリでは所有者接辭が義務的に付く名詞が非常に多く、部分や性質を表はす語彙 (Duom Kobu: ari-om *leaf*, duman-om *old*) などに必ず三人稱所有者接辭が付いてゐる。なかには地形語彙に三人稱所有者接辭がつくなど、意味的に所有者接辭の機能を果たしてゐないやうな例も多い (Duom Kobu: dag-om *slope*, bi-om *wash*)。この三人稱所有者接辭に見られる m を母音終はりの所有者接辭にも適用したのではないか。

スワウエ・エリバリ・グループのトーンは H, R, L の三つが對立する。このうち L は他の東シンブー諸方言と異なり、後續要素の基調を高く設定し直す場合がある。特に L トーンの名詞類に後續する動詞は全體が高いピッチで現はれるため、任意のトーンが H に變化するトーン・サンディー規則があるものと考えられる。

特徴的な語彙には以下のやうなものがある。スワウエ・エリバリ・グループのみにみられるもの (a)、ノマネ・グループと共通のもの (b)、他グループにも時々見られたり別の意味の同源

語が残されてゐたり、独自の不規則變化を被つたと考へられたりするもの (c) の順にならべた。

- (28) a. \*ne 2SG, \*be- *make*, \*deiwa *worm*, \*gioro *cicada*, \*mambu *pumpkin*, \*eba *sin ants*,  
\*tokarl *central post*, \*ebe *like this*, \*kira *fence*, \*kibl *pain*, \*kei *dog*, \*gama *boy*, \*abla  
*girl*, \*sugoro *plentiful fig*, \*kou *red*  
b. \*kure *ripe*, \*u bol- *to call*, \*kaba *moon*, \*ka-m *affection*, \*ger- *gather firewood*, \*kongo  
*stone*  
c. \*mugom *post*, \*mau- *carry on head*, \*emei *breadtree*, \*mran *hunger*, \*pagai *far*, \*obal  
*woman*

ケレやグナーなど一部のシネシネ諸方言もスワウエ的語彙を持つてゐるやうである。

### 3.2 クマン・グループ

クマン系諸方言は以下の特徴を持つ。

- (29) a. 祖語で語中の \*k, \*g をともに全ての環境で軟口蓋閉鎖音として保つ  
b. 動詞の三人稱單數未來で \*-na-m(未來-3SG) で三人稱單數形態素 \*-m が異形態 \*-b を  
もつ (\*-na-b 未來-3SG)  
c. \*l, \*r の形態音韻的交替をもつ (動詞、分離不可能名詞)  
d. \*ou → u, \*ei → i  
e. トーン變化 \*R, \*L → \*R  
f. トーン變化 \*H → \*R (long words)  
g. トーン變化 \*D → \*R (inalienable noun)  
h. 動詞の一人稱複數が \*-bn ではなく \*-mn に由來する  
i. 有聲閉鎖音は全ての方言で前鼻音化音  
j. 軟口蓋側面音をもつ方言がある

キンデコンドやクナナ・クは二種類の側面音を音素としてもつ。軟口蓋側面音 *ɮ* を音素としてもつのが「クマン語」の特徴と考へられてきたが、クマン系でもバリ・ナウレのやうに側面音音素を1一つしかもたないものもある。またクナナ・クは *ɮ* の分布が限られてをり、キンデコンドや先行研究の記述にある語末の *ɮ* は *l* で現はれる。その他方言別の特徴も合はせてまとめると、表 12 の通りである。

グループ内の語彙對應例を表 13 に、トーン對應・祖形を表 14 に示す。

筆者はキンデコンドの Endugla 方言を採取するまで落調トーンに氣付かなかつた。キンデコンドの Yogoml 方言と Kerowaki 方言について、筆者の調査ノートに明らかに落調トーンの特徴を示すピッチの記録があり、落調トーンはキンデコンド全體に存在する可能性が高い。本稿のキンデコンドの例は全て Endugla 方言による。キンデコンドのトーンについて Hardie (2003) は Gembogl 方言に基づき二種の語トーン對立を主張してゐるが、これも落調トーンの見落としである可能性がある。

	バリ・ナウレ	クナナ・ク	キンデコンド
l:l (velar lateral)	no	yes	yes
word-final L	—	no	yes
word-tone	H:F:R:L	H:F:R:L	H:F:D
p:*b, *d:*r, *g:*k merger	yes	no	no

表 12 クマン諸方言の相違点

	バリ・ナウレ	クナナ・ク	キンデコンド
<i>sleep</i>	ʽul	ʽul	ʽuL
<i>dog</i>	ʽal	ʽal	ʽaL
<i>pig</i>	ɲbla	ɲbLa	ɲbLa
<i>stone</i>	ɲkopl	ɲkobLo	ɲkobLo
<i>kunai</i>	ʽiraun	ʽidaun	ɲidaun
<i>fern</i>	ʽbika	ʽbiga	ɲbiga
<i>blast</i>	ɭbla	ɭbla	ɲbla
<i>light (not heavy)</i>	ɭu	ɭu	ɲu

表 13 クマン諸方言の語彙

	バリ・ナウレ	クナナ・ク	キンデコンド
*H	H	H	H
*F	F	F	F
*R	R	R	F
*L	L	L	D

表 14 クマン諸方言のトーン對應

クマン祖語のトーン對立はキンデコンドでは\*F と\*R の合流により單純になつたが、それ以外の方言には殘されてゐる。

クマン系言語の流音の對立について、Lynch (1983) はつとにより單純な體系を示唆してゐる。東シンブー語族全體としては軟口蓋側面音を祖語の音素としてたてる必要はなささうであるが、クマン系諸方言では表 13 にも示した Kinde Kondo の ɲbLa - ɲbla の擬似最小對などの存在から、クマン祖語に軟口蓋側面音を假定するのが良ささうである。

クマン系諸方言では分離不可能名詞の語トーンは祖語において二種類の對立しか想定する必要がない (表 15)。キンデコンドにおいては分離不可能名詞は全て下降トーンをもつ。このやう

な、閉じた語類特有のトーン・システムの単純化は他の東シンブー諸方言にも起こつてゐる。

	バリ・ナウレ	クナナ・ク	キンデコンド
<i>leg</i>	ʋkal-e	ʋkaL-e	ʌkaL-e
<i>father</i>	ʋne-m	ʋne-m	ʌne-m
<i>mouth</i>	ʌdra	ʌdra	ʌdra
<i>name</i>	ʌkak-i	ʌkag-ie	ʌkag-ie

表 15 クマン諸方言の分離不可能名詞

つぎはクマン・グループに特徴的な語彙である。クマン・グループにのみみられるもの (a)、他グループにも時々見られたり別の意味の同源語が残されてゐたり、独自の不規則變化を被つたと考へられたりするもの (b) の順にならべた。

- (30) a. \*kokn *breadtree*, \*gumane *cordyline*, \*dikr *maize*, \*kolko *frog*, \*dokor *cicada*, \*gaul *laugh*, \*kade *big*, \*ermene *noon*, \*gʌge *song*, \*kua *bird*, \*yaudo *leaf*, \*du d- *end*, \*kuri *little*, \*toL *fence*, \*wam *grease*, \*kobri *cassowary*, \*wela *bat*, \*guLo *cliff*, \*kor *new*, \*kibr *bow*, \*tu *covering*, \*meuLa *lablab bean*, \*yalbane *Casuarina oligodon*, \*neg *Castanopsis acuminatissima*, \*kaLka *Casuarina papuana*, \*poLko *Ficus caulocarpa*,  
 b. \*goL *red*, \*toki *snake*, \*gene *ginger*, \*ole *long*, \*dra *mouth*, \*drabie *tongue*, \*baudo *bird of paradise*, \*kiunabo *banana sp.*

グナアはトーン變化の面ではクマン語と同様の歴史を辿つたものと考へられるが、以上の特徴をもつてゐない。動詞の活用も他の東シンブー諸方言とかなり異なる。

### 3.3 ゴリン・グループ

ゴリン・グループは所有者接辭が二種の對立しかもたないなど人稱・數の體系が他の東シンブー諸語に比べ單純である。その他、ゴリン・グループの特徴は以下のやうにまとめられる。

- (31) a. \*k → u (non-word-initial)  
 b. \*g → ∅ (non-word-initial)  
 c. \*ou → u, \*ei → i  
 d. \*p:\*b, \*r:\*d, \*k:\*g の合流  
 e. 語末の \*m → n  
 f. 分離不可能名詞の所有者人稱・數の體系が \*-nan (1SG), \*-n(non-1SG)  
 g. \*L:\*D トーンの融合  
 h. 前鼻音化子音をもつ方言ともたない方言がある  
 i. 鼻母音を持つ方言がある  
 j. 環境により /k/ が [h] の異音をもつ方言がある

k. 方言により共時的なトーン體系が異なるが方言間でのトーン對應は規則的

東シンブー語族の所有者接辭のうち、人稱に關らない複数の所有者 *\*-ne* はクマン系諸方言とドム 1 以外には一貫して對立を保つ言語がまだ見つからず、後發の接辭である可能性がある。ゴリン・グループの所有者接辭は *\*-nam* (1), *\*-n* (2), *\*-m* (3) の三對立から出發し、語末の *\*m:n* が *\*n* に合流したことで所有者接辭の對立構圖が減つたのであらう。ゴリン祖語の *\*-nan* (1SG) はスワウェ・エリバリ祖語の *\*-nam* (1SG) と同源でさらに *\*-nam* に遡るだらう。ゴリン・グループとスワウェ・エリバリ・グループは近い關係にあるかもしれない。

	ゴ リ ン ・ ミ ア ン	中 ユ リ	北 ユ リ	オ ム コ ラ イ ・ キ ア	ソ ルト ・ キ ア	Bunn + 千 田	Evans et al
<i>bad</i>	「ki	「ki	「ki	「ki	—	「ki	「ki
<i>light</i> (↔ <i>heavy</i> )	「ura	「ura	「ura	「ura	「ura	「ura	—
<i>rat</i>	ʋdua	ɲdua	ʋdua	ɲdua	ɬdua	ʋdua	ɬduwa
<i>pig</i>	ʋbolma	ɲbolma	ʋbolma	ɲbolma	ɬbolma	ʋbolima	「bolma
<i>man</i>	ʋyal	ɲyal	ʋyal	ɲyal	ɬyal	「yal	「yal
<i>crazy</i>	ʋdu	ɲdu	ʋdu	ɲdu	ɬdu	「du	—
<i>urine</i>	ʋbul	ɬbul	ʋbul	ʋbul	ʋbul	—	—
<i>woman</i>	ʋapal	ɬapal	ʋapal	ʋapal	ʋapal	ʋabal	「abal
<i>good smell</i>	ɭmnan	ɬmnan	ʋmnan	ʋmnane	ɬmnane	—	?minan
<i>bed</i>	ɭbol	ɬbol	ʋbol	ʋbol	ɬbol	ɭbol	ɭbol

表 16 ゴリン諸方言の語彙

規則的なトーン對應を示す語彙の例を表 16 に示した。ゴリン諸方言のトーンの對應は表 17 のやうにまとめることができる。ゴリン祖語のトーン對立を残すのはソルト・キアのみと考へられ、他の諸方言では H 以外のトーン音素になんらかの合流を経験してゐる。Bunn の記録する Golin は筆者の採取した Golin-Mian の資料にほぼ一致する。ただし、Bunn の記録には一音節語のトーンに R が見られない。Evans et al の記録する Golin は分節音や語彙は Golin-Mian の特徴を示すが、筆者の採取したゴリン諸方言のトーンとは綺麗な對應を示さない。

分離不可能名詞ではトーンの對應が異なる。表 18 はゴリン諸方言の分離不可能名詞の例である。この例から分離不可能名詞のトーン對應は表 19 のやうにまとめられる。

ゴリン・グループに特徴的な語彙には以下のやうなものがある。ゴリン・グループにのみみられるもの (a)、他グループ (特にスワウェ・エリバリ) にも時々見られたり別の意味の同源語が



	ゴリン・ミアン	中ユリ	北ユリ	オムコライ・キア	ソルト・キア	Bunn + 千田	Evans et al
*H	H	H	H	H	H	H	M/H
*F	R	F	R	F	F	R	H/M
*F (monosyllable)	R	F	R	F	F	H	H
*R	R	R	R	R	R	R	H
*L	L	R	R	R	D	L	L/M

表 17 ゴリン諸方言のトーン對應

	ゴリン・ミアン	中ユリ	北ユリ	オムコライ・キア	ソルト・キア	Bunn + 千田	Evans et al
<i>leg</i>	「kaun	「kaun	「kaun	「kaun	ʋkaũ	「kawn	ʔkaun
<i>chest</i>	「dinn	—	—	「dinn	ʋdinĩ	「diinin	「dinin
<i>nose</i>	ʋguman	ʎguman	ʋguman	ʎguman	ʎgumã	ʋguman	ʔguman
<i>mouth</i>	ʋgran	ʎgran	ʋgran	ʎgran	ʎgrã	ʋgran	「gran
<i>head</i>	ʋgipɫn	ʋgipɫn	ʋgipɫn	—	ʋgeblĩ	ʋgibilin	—
<i>father</i>	ʋnen	ʋnen	ʋnen	ʋnen	ʋnẽ	「nen (ʋnenin)	ʔnen
<i>hand</i>	ʌon/ʌan	ʋon	ʋon	ʋon	ʌõ	ʌanin	ʌoon
<i>back</i>	ʌmun	ʋmun	ʋmun	ʋmun	ʌmũ	—	ʌmun ʔmun

表 18 ゴリン諸方言の分離不可能名詞

残されてゐるもの (b)、独自の不規則變化を被つたと考へられたりするもの (c) の順にならべた。

- (32) a. i 2SG, *mori-n palm*, *gomori grasshopper*, *eru like this*, *gala d- call*, *yuun tail*, *iba-n shadow*, *dal-n s- bad smell*, *ma breadtree*, *ten far*, *oble cordyline*, *gibl-n head*, *kaupa bird*, *taule little*, *kaya already*, *bl kau big*  
b. *eme afterwards*, *kau-n leg*, *du-n namesake*, *onba snake*

	ゴリン・ミアン	中ユリ	北ユリ	オムコライ・キア	ソルト・キア	Bunn + 千田	Evans et al
*H	H	H	H	H	R	H	M/H
*F	R	F	R	F	F	R	H/M
*R	R	R	R	R	R	R	M/H
*L	L	R	R	R	D	L	L

表 19 ゴリン諸方言のトーン對應 (分離不可能名詞)

- c. kira-n *ear*, prn *salt*, mala *now*, ki- *build*, mi- *carry on head*, wi- *cut down*, kar- *see*, war- *walk around*, gal- *call name*, mom-n *uncle on mother's side*, main *ground*

表 20 にゴリン諸方言の相違点をまとめた。

	ゴリン・ミアン	中ユリ	北ユリ	オムコライ・キア	ソルト・キア	Bunn + 千田	Evans et al
pre-nasal	no	yes	yes	no	no	no	no
word-tone	H:R:L	H:F:R	H:R	H:F:R	H:F:R:D	H:R:L	H:M:L
k→h	some dialects				yes	some dialects	
nasal vowel	no	no	no	no	yes	no	no

表 20 ゴリン諸方言の相違点

### 3.4 ドム

ドムの特徴は次の通りである。

- (33) a. \*pl- 「聞く」、\*el- 「作る」 の \*l  
b. \*k→ u (non-word-initial)  
c. \*g→ ∅ (non-word-initial)

- d. \*ou → u, \*ei → i
- e. \*p:\*b, \*r:\*d, \*k:\*g の合流
- f. \*R, \*L, \*D1 → R
- g. \*D2 → H
- h. トーン: H, F, R

一部分節音の變化がゴリン・グループと共通してゐるが、トーン變化はニマイ・ディカにむしろ近い。

他グループに見られないドムに特徴的な語彙には次のようなものがある。

(34) eku 「あとで」、ekl kui 「鳥の一」、gal 「男兒」、gar kle (1) / garan kle (2) 「蛇」、gapl 「皮」

ドム語には Dom 1, Dom 2, Era の諸方言があり、トーンの実現の一部や分節音の実現の一部など、主に音聲的な相違点があるほか、語彙にも違いが見受けられる。Dom 1, Dom 2 から表 21 に例示する。

	Dom 1	Dom 2
smell	√mnane	「kumne
tooth	√sik-i	「ki-m
butterfly	√kuim √kaim	「ur √kopa
tabacco	√to	√esu
pig	√bola	√bolma
different	√more	√pere
far	√ekl	「pai

表 21 ドム内方言差 (語彙)

### 3.5 その他の諸方言

#### 3.5.1 ノマネ・グループ

ノマネ・グループに特徴的な語彙には次のようなものがある。

(35) germ *outside*, bare *pain*, nole *red*

またトーンの體系は H, L, R1, R2 の四つの対立をもつ特徴がある。R に二種類が認められ、後続語の基調が低く設定されるものと高く設定されるものがある。

スワウェ・エリバリのまとめに記したように、スワウェ・エリバリと一部語彙が共通し、また所有者接辭の形式がスワウェ・エリバリに似る。

まだ資料が少ないためか、他の東シンブー諸方言と比較する際にトーンの規則的な對應がうまく見出せない。今後も調査を続けたい。

### 3.5.2 シネシネ諸語

シネシネ地域に分布する諸方言は、一つのまとまりをなすかどうか分からない。筆者独自のデータのあるグナアとニマイ・ディカについて述べる。

■グナア グナアはシネシネ地域に分布する言語で、動詞の活用の一部が他の東シンブー諸方言と全く異なる一方、トーン上はクマン系と類似し、語末の\*m→nを経た點がゴリン系と共通である。分離不可能名詞の所有者接辭の體系は完全にゴリン系と一致するのに語彙の一部はスワウェ・エリバリの特徴をもつ。本稿では分節音、語彙、文法形式の特徴から大まかに見られるグループ特徴をトーン對應から補強する方針で分類を行なってきたが、以上の事實からは本稿の方針による分類が不可能である。この言語はおそらく周囲からの影響をさまざまに被つたと考へられるので、今後シネシネ地区の諸方言の調査を進めたのちに、再度考察を試みたい。

■ニマイ・ディカ ニマイ・ディカもシネシネ地域に分布する言語で、民族的にはニマイとディカの二グループが話者集團をなす。この言語はトーン上ドムと共通の變化を経たと考へられるが、ドムが初期に経験したはずの\*g→∅ (non-word-initial) と\*k→u (non-word-initial) の二つの變化を起こしてゐない。シネシネ地区の諸方言のデータが不足してをり、やはりその調査を進めてから判斷したい。

## 4 をはりに

本稿では東シンブー諸語の系統論を試みた。分節音變化の歴史的な共有、文法的な近さ(體系、文法要素の同源率)、同源語の分布状況、言語の相互理解の度合を検討するとともに、トーンの對應が要になると考へた。

その結果、東シンブー語族内にほぼ確實にたてられるグループは次の通りと考へた。

- (36) a. クマン・グループ  
b. スワウェ・グループ  
c. ゴリン・グループ

一方、グループの確立までに調査が必要な言語群も多い。今後の課題は次の三點である。1. ほぼ確實になつてきた上記グループについて、各方言の動詞パラダイムを採取し動詞のトーン對應について明らかにする。2. シネシネ地区、ソルト地区、ノマネ地区の諸方言について特に未調査方言に接觸する。3. トーン變化の音聲的基盤や動機を明らかにし、祖語のトーンのリアリティーについて考察する。

## 参考文献

- Bergmann, Wilhelm (1953) *Grammatik der Kuman-Sprache gesprochen in der Gegend des Chimbu Flusses, East Central Highlands, New Guinea*. typescript.  
Bergmann, Wilhelm (1965/66) *Wörterverzeichnis der Kuman Sprache gesprochen in Inland von*

*Neuguinea im Chimbu District*. typescript.

Bunn, Gordon (1974) *Golin Grammar*, Vol. 5 of *Workpapers in Papua New Guinea Languages*. Summer Institute of Linguistics.

Bunn, Gordon and Ruth Bunn (1970) *Golin Phonology* A-23. Pacific Linguistics. ANU.

Evans, Nicholas, Jutta Besold, Hywel Stoakes, and Alan Lee (Eds.) (2005) *Materials on Golin*. The Dept. Linguistics and Applied Linguistics, The University of Melbourne.

Foley, William A. (1986) *The Papuan languages of New Guinea*. Cambridge University Press.

Ford, Kevin (1993) "A Preliminary Comparison of Kamano-Yagaria". *Language and Linguistics in Melanesia*, 24 (2), 191–202.

Hannemann, H.R. (n.d.) *A Short Kuman Grammar And a Kuman-English Dictionary with an Appendix*. typescript. (probably written c. 1969).

Hardie, Peter (2003) "Is Kuman Tonal? – An account of basic segmental and tonological structure in the Papuan Language Kuman". Master's thesis, Australian National University.

Irwin, B. (1974) *Salt-Yui Grammar*. Pacific Linguistic B-35. ANU.

Lynch, J. (1983) "On the Kuman 'liquids'". *Languages and Linguistics in Melanesia*, 14, 98–112.

McVinney, Paul A. and Louis J. Luzbetak (1954) *Tabare Dialect*. Alexishafen: Catholic Mission. Mimeo.

Nilles, J. (1969) *Kuman English Dictionary*. mimeo.

Osmond, Meredith (2001) "The Semantics of *Mong* in the Chimbu-Wahgi Languages of the Central Highlands, Papua New Guinea". In Pawley, Andrew, Malcolm Ross, and Darrell Tryon (Eds.), *The Boy from Bundaberg: Studies in Melanesian Linguistics in Honour of Tom Dutton*, Pacific Linguistics 514, 251–259. Canberra: Australian National University, Research School of Pacific and Asian Studies.

Piau, Julie Ann (1981) "Kuman Classificatory Verbs". *Language and Linguistics in Melanesia*, 13 (1-2), 3–31.

Swick, J. (1966) "Chuave Phonological Hierarchy". *Papers in New Guinea Linguistics No.5*, Pacific Linguistics A-7, 33–47. ANU.

Swick, J. (1969) *Chuave (Gomia) Dictionary*. mimeo.

Tida, Syuntarô (2003a) "Comments on 'The Tonal System of Skou, New Guinea' by Mark Donohue". In Kaji, Shigeki (Ed.), *Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Historical Development, Phonetics of Tone and Descriptive Studies. Proceedings of the symposium (Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, December 17 to 19 2002)*, 365–368. Tokyo University of Foreign Studies.

Tida, Syuntarô (2003b) "Sinbû Syogo to Gotôn — Goringo to Suwawego no Saikaisyaku (Simbu Languages and Word Tone — Reanalysis of Tone in Golin and Chuave —)". *PAIK (Phonology Association In Kansai)*, Kôbe, 26th April 2003.

Tida, Syuntarô (2006a) *A Grammar of the Dom Language*. Ph. D. thesis, Kyoto University.

- Tida, Syuntarô (2006b) “Systems and Correspondences of Simbu Tones: Toward Proto-Tones”. Paper presented at Phonology Association in Kansai (PAIK), 27th January 2006, Kobe University.
- Tida, Syuntarô (2008) “Some issues in reconstructing Proto-Simbu tones”. Paper presented at the second Papuanist workshop, 28-29 June 2008, University of Sydney.
- 千田俊太郎 (2000) 「ドム語のトーンに関する考察」. Master’s thesis, 京都大學大学院.
- Trefry, David (1969) “A comparative study of Kuman and Pawaian: Non-Austronesian languages of New Guinea”. *Pacific Linguistics B*, 13. Canberra: Australian National University. iv, 94 p.
- Wurm, S. A. (1960) “The languages of the eastern, western and southern highlands territory of Papua and New Guinea”. In Capell, A. (Ed.), *Linguistic Survey of the South-Western Pacific, new and revised edition*. South Pacific Commission.
- Wurm, S. A. and Shirô Hattori (Eds.) (1983) *Language Atlas of the Pacific Area. Part I. New Guinea Area, Oceania, Australia*, Vol. C-66 of *Pacific Linguistics*. Canberra: Australian Academy of the Humanities.

## 謝辭

本稿で紹介したデータは、これまで Dom について教へてくれた方々に加へ、以下の方の協力が不可欠でした。記して謝意を表します。Mid-Yuri: Ol Dale は Mo Pl 出身の Kaupa Maikol さん (30 代前半か)、Mid-Yuri: Ol Dale は Mo Pl 出身の Polin Dilin さん (30 代前半か)、Mid-Yuri: Ol Dale は Mo Pl 出身の Aina Saimon さん (60 代か)、North-Yuri: Moro Sul は Aln Benge 出身の Ketrin Delpa さん (20 代後半か)、Eri Bari: Wangoi の Yagari 氏族出身の Ketl Bomai さん (20 代前半か)、Chuave: Duom Kobu 氏族出身の Depsi Yaye さん (30 代なかばか)、Dika: Ar Gol 出身の Papa Monita さん (20 代なかばか)、Salt Kia: Kilau は Waidu 出身の Mata Kama さん (30 前後か)、Gunaa: Igi Di の Marm Ku 氏族出身の Matlina Mai さん (40 前後か)、Kia: Omkolai は Gwi Nime 出身の Sine Ku さん (40 前後か)、Golin-Mian: Mul の Golin, Kobla Ku 氏族出身の Makret Meri さん (50 前後か)、Golin-Mian: Borml 出身の Ana さん (40 代後半か)、Golin-Mian: Gumine 出身の Prisila さん (20 代なかばか)、Megne: Megne は Dama 出身の Matilda Elemek さん (1985~1986 年生まれ)、Kewa-Meba: Digamane 出身の Meba である Sagu Wai さん (20 代前半か)、Kewa-Meba: Digamane 出身の Meba である Rosen Nime さん (20 代後半か)、Kunana Ku: Iwage の Endugla, Kakma Kane 氏族出身の Makret Las さん (20 代なかばか)、Endugla: Bepi Maria さん (30 代前半か)、Naure: Gian Lusa さん (30 代なかばか) ありがとうございます。